

## 入道雲

三台の自転車が、陽ざかりの国道を飛んで行く。あとになったり前へ出たり、ときどき並んで後を振りかえりつつ、白練入りの帽子をかぶった中学生らしき五人。

三台のうち二人乗りが二台である。

事故もなさそうなのに、彼ら一せいにストップ。ペダルを踏む者の交代らしい。ちょっと近づいて彼らの会話を耳にした。

A「ようし、これからが本勝負だ。約束は約束だぞ」

B「オーケー」

C「では出発。スタート」

ちょうど交通係の補導員も、午睡の間である。路面のアスファルトが流れでるような暑さで、暴走するオートバイやトラックの数も少ない。彼ら少年の競走も時を考えて計画されたものであろう。二人乗り二台が競走者で、正常一人乗りの者が、審判者であるようだ。その審判車が、遅れがちである。

何処まで行ったか彼ら少年、汗をふきふきついて行った私は、自分の目的地へ思わず早く着いた。

若者は元気である。大人の世界から見れば、自転車の二人乗りは交通法規に違反するとか危険であるなどと口やかましく言いたくなるが、そのことだけをやかましく言って良いのであろうか。大人の中にも、日傘を差した女を荷台に乗せて走る自転車を時々見かける私は、私なりに考えさせられた。現在の社会は、果して子供たちが健康で明るく育つための良い環境であるのか。大人たちがほんとうに児童たちの声を聞き、彼らの成長過程の心理をつかんでいるのか。自分の家庭生活の中でどれだけ子供を中心にして考えているだろうか等々。家庭環境や親の養育態度が、子供の性格形成に、いかに重要であるかを反省させられた。二人乗りの子供に、それとなく注意をうながしたとき、子供は言った。

「おじさんも僕たちくらいときには、二人乗りをしたことがあるでしょう。ぼくたちはオリンピックの選手になるため、からだをきたえておるのです。そうやかましく言いなさんな。オーケー、オーケー。酒はのんどらん。ヒヒヒ……」

入道雲が次第に大きくふくれ上って行った、私の頭の中にも。

## ある夕景色

部屋には、いっぱい、むせかえるほど煙がただよっている。ベッドには、掛けぶとんから上半身を出した男が眼を見ひらいている。やせ細った身体、青ざめた肌に紫煙がひっかかりながら、天井へ昇って行く。ひっそりと煙草を吸うことが彼に残された唯一つの動作とでもいうように。隣室の話し声も手にとるように聞こえ、自分の咳払いにも気がねするような静けさである。明け放された硝子窓から時たま流れこむ風は、つやのないササクレタ肌に冷めたいが、天井にたまった「たばこ」の煙を浄化する。

これが療養所の安静時間の実態だが、とにかく静かではある。この静かな建物に、待ちかねた拍子木の音がひびき渡ると、今までの寂しさは打ち破られ、部屋にはラジオの音が充滿し、廊下ではバタバタと足音がはげしくなる。これも一しきりで、騒々しさが終りかけたころ、炊事場あたりから瀬戸物のふれあう音、続いて運搬車の車輪のきしむ音が近づいて病室に食事が運ばれて来る。

お膳の上には、クジラのテキに八宝菜、リンゴ四分の一、野菜サラダ。

午後四時四十分、夕食を終えると浴室に行く者、テレビを見るもの散歩をするもの、建物の内外に人が右往左往し、世間なみにあわただしい夕方の風景が展開する。午後九時消燈時までの時間を誰もが持てあまし、いらいらしているのだ。夕食時間が四時半ともなれば八時頃には腹も減ってくる。第四回目の食事は自分で作らねばならない。ものぐさな者には持つてこいのインスタントうどんということになる。病棟の看護婦詰所前である七輪（常時患者の飲料用湯を沸かすため）にかけてある大ヤカンの湯がぬるいので、小さなヤカンを煉炭にかけていたら、七年生が勝手に下ろし実にロングタイム小豆をたいた。

世俗を放れたこの社会にも、厳として階級があるのだ。入所して日の浅い者はことごとく遠慮を強いられ、それに従わねば生活しにくい。だが昔から牢屋にも牢名主なるものが入り新入りをいたぶった。療養所に入ることは、刑務所に入ると同じだがというのが、わがままを押さえる自戒の意味を含めた私の感想なのだから、新入りの不満はしばらく引込めておくことにしよう。

さて、インスタントうどんをどんぶり一パイ平らげたところで、夜のとばりが厚くなる。

電灯のある間に書きたいことを書いておこう。九時になれば睡眠が訪れなくても自分との対談があるだけだ。

## 池の辺り

山を切り開いて建てた病院の前庭からは、遠く開けた平野の眺めをほしいままにすることが出来る。さらに足下には池がある。とかく殺風景になり勝ちな、公共建造物の前景に池があることは、すばらしい恩恵である。

寝まき姿の池の端の住人達は、まるで湖上生活者のように、一日をこの池のほとりですごす。枯れ残った一本の柳がみずみずしく生まれかわった姿で長い袖を垂れ池の面をなでている。

水面には日ならず蛙になるであろうオタマジャクシが跳躍し、盛んに水泡を造っている。水際はコモや葦が生い繁り『さだかにそれとわからねど』紫の花が点在している。秘蔵の鉢物でも鑑賞するように、池のほとりは人々の心に自然を見つめるゆとりを生んでゆく。シャバに居たころ、多少裕福な暮らしをし、小唄の一つも覚えたという男が、ベンチに腰をおろし怪しげなふしまわしで喉をふりしぼる。

五月雨に池のまこもに

水まして、いづれがあやめ

かきつばた……

「ありや何ですな、あやめとかきつばたは花を客観的に見ると、ちょっとも変らんが、葉がちがうそうですな、わしや辞典で調べたが客観的には……」

小唄をさえぎった男は、もの知りは客観的という言葉を使うものだと思うのか、やたらに客観的云々を連発し小唄男にこびる調子である。しかし、小唄男はヘソまがりで、もの知り氏の相手になろうとせず、気分をこわすことおびたしい。もの知り氏はあきらめて話相手をかえた。

「あんた俳句を作りよるな、今ごろはあやめとかかきつばたは俳句にはならんとな。あいびきを一ちよう読みこんでみんな」

もの知り氏に呼びかけられた若者は、池を見詰めて思案に耽っている様子だったが、侮蔑的な感情をむき出して、じろりと睨むと後を向いて立ち去った。またもや相手を逃がしたものの知り氏は、引こみがつかなくなっただのか水際のこもの中に座り込み魚を釣っているグループに、くだけた調子で話しかけた。

「魚は釣れよるな？ 晩飯にはまたアライにしてもらおうか、たのんだけばい……」

「よか、一皿五〇円ばい」

古き良き昔を思い出させる唄が、一くさり終ったところで、小明男はふと我にかえる。「一皿五〇円か」此処はシャバと隔離された社会なのだ。建物の中で使われた汚水は、この池の中へ流しこまれる。その中に住む魚を釣り上げてアライにして食う人、野菜を中性洗剤で何度洗っても清潔感を満足させ得ない人、まだもえ残りが有ったのかと思われるような、よい年をして恋を語る一組、それを何の感情もなく見送る者、詩を生む事によって解放感を保つ者等々、寝まき姿の雑多な住人達がそれぞれの型で池のほとりで楽しみを尽くした後ベッドに帰ると、池は何も映さなかった様に、あぶくを浮かべ静かに暮れていく。

『炭都ジョッピング』一九六六年六月

## 石のいのち

先日、椿八幡宮の神殿屋根葺替の話で氏子総代が集まった。その折、境内に祭つてある猿田彦大神と刻まれた石が、風化してきているのに気付き、年号を調べてみたら、正徳四年と刻んである。今一つの方は延享とだけよりわからない。

家に帰って、何年くらい経っておるのか調べるのに本棚の大掃除がはじまった。たった六畳一間の住居はほこりにまみれ、日頃やりっ放しにしている自分にあいそがつきる程のサワギ。

さてようやく参考書が見つかった。簡単な年代表をなくしたことを嘆きながら分厚い本をめくり、老眼にやっと正徳四年をとらえた。紀元二三七一年、西暦一七一一年、ざっと二四七年前であることがわかった。

一一四代中御門天皇の時代で、徳川八代將軍吉宗ということも知ることができた。正徳の次は享保で、いわゆる享保の改革、新井白石の時代でもある。延享は、正徳よりも三三年後の一一五代桜町天皇の時代。

それにしても二五〇年位で、あんなに石が風化するとは知らなかった。それからみると、古い家の棟木に使われている大木は、木でありながら相当永くビクともしないものであるなあと対象的に考えさせられた。というのは、過般土蔵が蝕害でかたむいたとき、改築するのにバラしたのだが、棟木に墨書されていた年号からいうと、二〇〇年も経っているのに、乾ききって石のように固くはなっているが、まだまだ完全無欠でそのまま使える。勿論、雨ざらしにすれば別の話で、石材と木材との比較論は成りたたないが、木よりも石の方が強いと

いう、あいまいな観念をちょっとゆすぶられた点で興味深かった。そして、石は強いという前提のもとに、人が永遠に生きたいという願望を、石碑の形で残こす習慣など、エジプトの古代にまでさかのぼり考えてみたりした。

【穂波町公民館報】一九五八年六月

### トンチャン仲間

トンチャンとは、豚の腸を鉄板のうえで焼き、タレをつけて食うのである。トンチャンという名称は誰がいつごろから言い出したのか私は知らない。

私がトンチャンの味を知ったのは、炭坑の組合長をしていたときで、バクダン（アルコール）のみながら、トンチャンをつまんだものだ。はじめて口にいれるときは、あまり気持の良いものではなかった。しかし同好の友達が教えるように、よく焼けたものを十分にタレをつけて食うと、とてもおいしいものであることがわかった。なれるにつれて、なまやけが軟らかくてうまいことが分った。タレも自家製で、おのおの自分の口に合う味をつくる。材料は、にんにく、とうがらし、しょうゆなど。サラダオイルを一、二滴落とすとうまい。トンチャンを食べるときは、いつも五人で屠殺場から豚の臓物を一キロほど買ってくる。一週

間に一度はたべたものだ。

秋松の田舎へ行くと、部落の人たちが、何事かあるとトンチャンを食べたものである。福岡ではどこでも大いに食う。またトンチャンを売る店も沢山ある。これは二十五年も前のことである。近頃は東京でもトンチャンが盛んのようなのである。江戸ッ子もずいぶん変わったものだ。カロリーも豊富であるし、栄養もある。こんなうまいものを食わずぎらいで、とやかく言っていた江戸ッ子がチャンチャラおかしい。トンチャンが食える仲間も沢山いる。キレイゴトだけのおつきあいはマッピラごめん。

私の十五六歳頃、夜店でよく食べた「牛めし」も子供相手の「やきとり」も、みな臓物をきれいに洗い、小さく切って味噌をつけて、焼いたり煮たりして売っていたものである。この頃からトンチャンは世の中のおき食べ物であった。

最近スーパーやマーケットにも、きれいに洗ったトンチャンがビニール袋に入れて売っている。タレまでつけて便利になったものである。私の妻は残念ながら、この美味しさを知らない。いわゆる食わず嫌いというやつである。そのくせ鳥の肝や臓物をよく買って来て、皆と一緒に食べる。彼女は観念的に「とり」と「ぶた」を、わけ隔てしているようだ。昔、殿様が「おしのび」で町に出て、さんまやうなぎのかばやきを食べて味を覚え、城中へ帰っ

てからも、さんまやかばやきをつくれと家臣を困らせたという話が、落語などで今なお語られているが、これは何を意味するのであろうか。この落語は庶民にいろいろな意味で教えている。まず第一に権力者どもが、ゲスの食物と思っていたさんまやうなぎを美味だと感覚したことである。その他、小気味の良い諷刺がある。

私は韓国や朝鮮など友達が沢山いるので各国の食物の食べ方を教わった。なかでも、渋谷でスナックをしている平川君には格別お世話になった。トンチャンで一番思い出すことと言えば、何といっても九州時代である。穂波町忠隈にある韓国人のトンチャン屋は、私の行きつけの馴染みの店で、私が行くと一と間しかない四畳半位の座敷（経営者の婆さんの寝る座敷）へ通し一番良い柔かいトンチャンを出してくれたものである。私は若い連中をつれて行き、その店で自慢話をしたものである。とにかくその店での私は「ヤンバンサラメ」（お大尽）であった。

『リベルテール』46号 一九七三年一〇月